学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.35 2009年12月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2009年12月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

Mail Seminar

感情の論理 vol.34「褒める技術」

今、「褒める技術」が流行っているようです。

確かに、一昔前のように叱咤激励で動く人は少なくなりました。以前、とある中小企業の経営者が「昔は社員を靴で殴って鍛えたものです」と自慢げに?話しているのを聞いたことがありますが、そんな手法で発奮し、成長を遂げる若者は絶滅しています。そこで、褒めて伸ばそうという発想になるのですが、これがなかなか難しい。現在、主流になっている「褒め方」はＹＯＵメッセージではなく、Ｉメッセージを使うことです。

ＹＯＵメッセージとは「よくやった」「すごいな」…と、主語が相手になっている褒め方です。それに対してＩメッセージとは「君が頑張ってくれて私は嬉しい」のように、自分を主語とした褒め方です。

ＹＯＵメッセージの場合、どうしても褒めている側が上位にあることが前提になってしまいます。また、例えば90点を取った子供に「凄いな、頑張ったな」とメッセージを送った場合、その子は、「90点で凄いならば、先生は 100 点を取ったＡ君のことはもっとすごいと思っているんだ」と理解してしまいます。

Ｉメッセージならば、そうした誤解?は防ぐことができますし、上から目線の褒め言葉にもなりません。そうした意味でＩメッセージは優れた手法です。

ところで、それをもう一歩進めたらどうなるでしょう。そこに最高の褒め方が存在します。その方法とは…質問してあげることです。

「○○君、今回の点数の伸びは凄いなあ。どんな方法で勉強したのか、教えてくれないか。以前の君のように、今も苦しんでいる仲間達の福音になると思うので、君の力を貸してほしいのだけれど。」

つまり、相手を上位者として扱うわけです。要は、褒める行為の目的は何かということです。当然、そのことによって相手の自尊心を高め、モチベーションを高めることです。その目的が叶わなければ、単に有頂天にさせるだけです。

私はお酒が飲めないので、そうした場所に行くときは決まって先達（水先案内人）がいます。そうした方の馴染みの店に連れて行ってもらうのです。そこで、森は塾関係の仕事をしていると紹介してくれるのですが…あるクラブに誘われたときのことです。

いつものように招待してくれた方が店のママに私を紹介してくれたのですが、私の正体を知るやいなや、ママから相談を 持ちかけられたのです。

「いやあ、森先生。いい人に出会えたわぁ。実は、私の息子が今度受験するんだけれど、なかなか勉強に意欲的にならなくて困っていたの。どうすればいい?」

そこは私の得意分野です。調子に乗って持論を述べている最中にハッと気付きました。

「俺、見事に乗せられている…」

よく考えてみれば、そんなに都合よく受験生の息子がいるとは思えないし、そうでなくても、そうした場所の女性は私生活を見せないことが暗黙のルールです。（私生活については嘘をついても許される?）ママは、どうすれば客（私）が気持ちよく店でのひと時を過ごしてくれるかを解っているのです。人は自分の得意なことを説明しているときが最も気分がいい。特に男は自慢話が大好きです。

人に教えるという行為が優越感を伴う快感だということは、塾人ならば誰もが理解していただけると思います。そして、教えるという行為そのものが最大の学びになるということも。

子供だって同じです。我々が弟子になって教えを請うことで、その生徒の自尊心を高め、モチベーションを高めることにつながるのです。

この方法は応用が効きます。どうしても上手にコミュニケーションが取れない生徒に対しては、その子の得意分野を探して教えを請うところから始めてはいかがでしょうか。

「○○君。君、エバンゲリオンについて詳しいらしいなあ。最近、息子がエバンゲリオンに夢中なんだ。こっそりエバンゲリオンを学んで息子を驚かせてやりたいので、私に教えてくれないかなあ。」

こんな感じからコミュニケーションの糸口を見つけることも可能です。

褒めることはある意味、叱ることよりも難しい行為です。安易に使うと弊害が大きいものです。ぜひ、褒める技術をスタッフ全員で学んでください。

全国学習塾援護会 森 智勝

学びに新しい「挑戦」と「観点」を。　vol35　2009年12月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2009年12月20日発行　編集・発行：中央教育研究所（株）〒732-0811　広島市南区段原2－15－5　http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

業界TOPICS

vol.09　「塾の継承問題」

創立以来半世紀を超える塾も全国にいくつかあり、二十年から三十年という歴史を地域で刻み続ける塾も多数あります。当然、その中では継承問題が深刻となってきています。今回は、継承した塾のいくつかに注目し、成功事例や失敗事例を検証してみたいと思います。
（塾名は全て匿名とさせていただきます）

◆　成功事例

‥各社、内部充実で質的なものの向上で生き残りを図るための継承に注力‥‥

東日本大手Ａ塾
「創設者から二代目として継承したが、幹部の約半数は退いていただいた。地域一番塾としてのブランド力を維持するため、個別指導や高校部など新たな展開をしつつ、事業部門の独立採算制を確立し、内部充実に努めました」

東日本大手Ｂ塾
「ブランド力に頼らない新規の事業展開に挑戦しつつ、本当の継承は前代の最高利益を上回ることと位置づけ、質的上位の経営を目指しています」

首都圏大手Ｃ塾
「先の見えにくい混沌とした時代では、単独ではなく他社と積極的に提携していくことが大事であり、グループ内もホールディング化で独立性と連携を強化して企業体質を高めます・・・そうしなければ高齢化していく人材の活用もおぼつきません」

◆　次期継承について

‥少しでもプラスにすれば次の自信につながる‥‥

東日本大手Ｄ塾
「三年から五年をかけて、次期継承について準備をしています。特に、新規展開ではなく統廃合と質的な内部充実が課題であり、生き残るためには、質的に一番であり続けることが至上命題であると確信しています」

中部東海大手Ｅ塾
「他社より努力しても増収増益が約束される時代ではなくなりましたが、これだけ頑張って少しはプラスになった・・・という場合には大きな自信につながります。無理な生徒確保よりも、そのような経営のできる若手幹部を育てていきたいです」

◆　総括

「内部充実で質的向上」では、特に「教務の充実」と「高コスト体質の改善」が課題であり、特に、指導陣では「人材の若返り」、経営管理面では「情報の共有と数値管理の効率化」が最優先課題です。また、アナログ的な面をデジタルで支援できるシステムの導入とカスタマイズが進行中です。より進化した管理システムを低コストで導入しつつ、人材の若返りを図る努力が求められています。

歴史に学ぶ。
＜無名の人「柏木八郎左衛門」＞

最優先の国家事業「丹那トンネル工事」

日本列島は狭い国土に多くの山々が海際まで迫る特有の地形です。特に、箱根から熱海にかけては、静岡県と神奈川県を分断する峰峰が富士山の裾野から海のすぐ近くまで及び、江戸時代には「箱根八里」と「越すに越されぬ大井川」は、東西を行きかう旅人にとって特別な難所でした。

明治に入り、鉄道網の整備によって、日本全土、特に東京と関西を結ぶ東海道線を完結させ、そのスピード化は国運を決める重要事項として、最優先される国家事業となりました。

そんな時代背景があり、丹那トンネルの工事は、熱海から三島まで山越えをせずに電車を通すための、当時日本最大の工事となりました。

温和な人々を鬼と化した「渇水問題」

この工事は想像をはるかに超える難工事となりました。かつて湖だったといわれる丹那盆地の地下を掘り進めれば掘り進むほど、膨大な量の地下水がトンネル内に湧いてきたのです。その量は箱根の芦ノ湖の貯水量の三倍と言いますから、想像を絶する水量です。

そのため、盆地に流れ込んでいた水脈のほとんどが枯れ、盆地の農民たちの生活を直撃しました。恵まれた自然の中で、まるで時間がスローモーションのように暮らしてきた温和な住民たちは突然鬼と化しました。彼らこそ鉄道網近代化の最大の被害者でした。

命をかけて仕事をすること

実直で前向きな性格で農民たちに信頼されていた柏木八郎左衛門は、鉄道省と住民の間に立ち、県庁の一職員として、生活苦に追い込まれた住民の救済対策に走りまわります。世相は、世界的不況を背景に軍部が政治を支配する暗い時代で、政府の予算も極めて苦しい状況にありました。

しかし、柏木は住民がどのように苦しんでいるかを具体的な数値を調べあげて提示するだけでなく、自ら鉄道省の大臣室に乗り込み、住民の代わりに直訴するのです。以下は吉村昭の「闇を裂く道」からの抜粋（一部筆者書き替え）です。

「地元の者たちは気ままますぎる」と大臣。柏木の顔は急に紅潮し、体がふるえはじめ、拳をにぎりしめた。

「それは言いすぎではありませんか。理由あってしたことです。農民たちは陛下の赤子です。陛下の赤子を飢えさせてよいと言われるのですか」

柏木の眼に涙がにじみ、感情を抑えきれず彼は拳を机に叩きつけた。皮膚が破れ、血が散った。

「そうか、よし、わかった。悪いようにはしない。今日は帰れ」

拳から血を流しながら柏木は廊下に出て去った・・・。

その後、トンネルは貫通し、保証問題も解決しました。柏木は傷ついた腕を布で吊るしたまま、生き生きと生きるための環境を奪われた住民のために走りまわります。全く無名の人ですが、例外なく、この書を読んだ人は柏木という人間の "生き様 "に感動を覚えるのです。人間は弱い、だからこそ強いものにしっぽを振らず、自分の生き方を貫かなければならない・・・それを彼は自分の行動で示してくれている、そのように思えてなりません。

取材／記事　：　新教育産業監修・月刊私塾界記者　千葉誠一

◆ 柏木八郎左衛門（かしわぎ・はちろうざえもん）◆

柏木氏については、詳細がよくわかっていません。明治後半に静岡県で生まれ、学校を卒業後に静岡県庁の耕地課の農林主事として精力的に仕事をこなしたことだけがわかっています。上記の内容は、主として、吉村昭著「闇を裂く道」（文春文庫）から引用してあります。吉村氏は残存する資料をもとにしつつ柏木氏の子孫にも取材しています。

◆ 丹那トンネル（たんなとんねる）◆

東海道本線熱海―函南間の長さ7841メートルの複線鉄道トンネル。1918年（大正7）着工し、34年（昭和9）開通。16年の年月をかけて完成した。

■　ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。
できるだけ対応したいと思っています。　ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouiku.co.jp